

[第 2 報告] 「 レインボープランと農業経営 」

竹田義一氏 (レインボープラン推進協議会生産流通委員長、農業実践者)

・理想として描いてきた農業経営像

個人完結型複合経営

私は農業に携わり 35 年になる。私が農業に就いた頃の農業は、高度経済成長にあわせて農産物も大量生産、大量出荷というふうなレールの上にあった。つまり単一作物、単一飼育という経済合理性をもとめて経営の改善が進められていた。しかし私はそのことに対して非常に大きな疑問を持っていた。それはたとえば家畜の大量飼育をすると、大量の家畜糞尿が排出される。しかしその家畜糞尿の処理は非常に乱暴なやり方でしか行われておらず、このことによる環境汚染がひとつあり、また、長井市の場合には米の大量生産を主眼においた構造改善を行っており、その結果として大量の籾殻が投棄されていること、つまり有効に資源化されていないという現実があった。そういう農業のやり方について私は大きな疑問を持っており、私の理想とする農業経営のありかたは、個人完結型の複合経営であった。その理由は、それぞれの作物分野、畜産分野における廃棄物が次の作物分野への資源へ変わるからである。つまり循環が一つの農業経営のなかで完結されることが私の描いてきた農業の理想像だった。

域内市場出荷によるコスト削減

次に、作られた農産物が大量に広域流通に乗せられて域外へと出荷されるわけだが、その際、出荷のための資材、あるいは流通経費といったものが収益を削っていき、結果として農民の懐に入る収入は小さいということがあった。そういう経営のありかたでは自分の農業経営を圧迫するだけで豊かにはなれないのではないかと思ひ、むしろ価格形成を自分で行えるほうが有利であると判断し、地域内市場への出荷と同時に、直納システムをとることによって利益性を向上させていくことが、これからの農業に望ましい姿ではないかと思っていた。また、地元で作られた農産物が地元の人に食べられていないこと、野菜や果物の生産量が長井市においては極端に少ないといった現状があり、言い換えれば、米に特化されたことからくる地域自給率の低下があった。これを何とかして地元で野菜、果物など、いろいろな食材を豊かに作れる環境を作りたいと思っていた。高校を卒業し、就農すると同時に考え始めた構想ではあったが、振り返って言葉にまとめると以上のようなことになる。こういった思いを持ちながら長年農業をやってきた。

・農業の立場からレインボープランに求めるもの

生産と消費の信頼関係構築

レインボープランに対して、農業従事者の立場から求めるものを次に申し上げたい。最初に挙げたように、大量生産による域外流通が主体であったことから、生産と消費との関係は非常に見えにくい関係にあった。これをお互いが見える関係あるいは見られる関係にしていくことが信頼性を確保するうえで非常に大切な関係になるのではないかと思われる。つまり生ゴミを堆肥の資源としてしっかり分別していただく、そして消費という関係からグリーンコンシューマーという意識の向上をお願いする。つまり生産と消費との関係の中での、密接な協力体制を作るというのがこのレインボープランに求められている。

堆肥に対する信頼性

地域内で使われる堆肥は、まだ充分足りていない。農業者の立場から、堆肥に対する思いというのは消費者以上に強く持っているが、堆肥に対する信頼性は絶対条件として、安全性、有効な成分、そして有害な成分がどれだけ入っているか、いないかのチェックが最低限必要である。その上でわれわれが求めるだけの堆肥の量が確保できるかどうかレインボープランに求められるもうひとつの重要な課題である。そのほか、経済性の問題などさまざまな問題があるが、ここでは割愛する。

・生産現場における成果と課題

高齢農業従事者の楽しい世界

次に、生産・流通過程のなかで体験してきたことを話したい。まず生産現場における成果についていえば、このプランがスタートして以来数多くの農民の方が参加、脱退を繰り返しながら徐々に生産農家が増えていった。その中で非常に印象的なのは高齢の農業従事者の意見で、50年間農業をしてきて今ほど楽しいことはない、という言葉であった。というのは、いままでいかに収益をあげて、いかに経済的に豊かになるかということだけを目標にやってきた農業だが、このレインボープランにかかわってからは、経済性というのは重要だが、それに加えて人と人とのかかわりのなかで味わえる楽しさが、いま大きなウエイトを占めているということを印象的に語っておられた。

レインボープランの延長上に仲間づくりというのが始まっている。現在かぼちゃを中心とした生産グループ、もうひとつはそばを中心としたグループがあり、ただ単に生産グループの会員だけの間で情報交換が行われるばかりだけではなくて、一般の消費者に対しても仲間づくりを呼びかけている。そばを中心としたグループはオーナー制度を導入して、会費を頂きながらそばの種をまくことから、実際に収穫をし、そばを打って新そばの味を楽しむ、といったように交流事業まで発展している。また、直売所に農産物を置くことによって、高齢者も年金に加えて、直売所であげた収益を得ることができている。

消費者からの評価とリピート

進まない生産拡大

さらに一番大事なことは、顔の見える関係から、消費者の農産物に対する評価が直接に入り、その情報を次の生産に生かせるという関係ができていることである。美味しければリピートも増えることになる。これが遠隔地の消費者とはこのような関係になれない。

しかし、いいことばかりでは決してない。収益性の不安、価格低迷によって農業が非常に元気がない状況になっている。また、農村から農民がいなくなってしまうという現実、つまり、兼業化が進んで専業農家が極めて少ない。この現象のなかで生産拡大が思うように進まないというのが私たちの抱える課題である。代々農業をついで行くという世襲型の農業が崩壊してしまったことも原因だ。ここから生産拡大にどうつなげていくのかということを考えてとき、新世代型農業経営体質への転換が必要になるかと思われる。いろいろやり方はあるにしても、この地を守り、食料の自給体制をしっかりとするには、農家以外の若者を受け入れる形も視野に入れてもいいように思われる。

・流通現場における成果と課題

直販システム、取扱店の指定、学校給食など流通選択肢の整備

飲食店、食品加工業者の取り組み

域外への流出と価格形成

次に流通現場の問題だが、直売のシステムや取扱店の指定は現在7店舗ある。学校給食などの食材の納入システムも確立されており、流通の選択肢をいくつかそろえた。そのことによって、逆に少ない農産物が小量ずつしか行き渡らないという問題点はあるものの、いくつかの流通経路を持つことは必要ではないかと思われる。面白いのは、レストランや飲食店でレインボープラン農産物を使った新しいメニューの開発である。例としては野菜をトッピングした長井ラーメン、レインボーそばなどの麺類、お弁当のお惣菜などに使われることもあり、また味噌、豆腐、お菓子、納豆など加工食品として市内の小売店を通して販売されている。そういった農業+他産業との連携が進んでおり、それが徐々に広がりつつある。

流通面の課題としては、まだまだ生産量が少ないということから、大量に消費者に届けることができないこと、市場機能がまだ不十分であるということから、域外へ流失するなど、結果として地元の消費者に十分に行き渡らないことが現実としてある。一方、域外資本で長井市内に進出する大型店が展開することによって、域外から持ち込まれる農産物も大変多くなっている。こうなると価格形成が地元の卸売市場を越えたところでなされ、結果として、私たちの農産物がまっとうな評価を得られないというのが現実としてある。

・ 目標と課題

シンボリックなレインボープランに トータルとしての地域環境保全型農業

これからのレインボープランに関する農の立場からの目標と課題というところに移りたい。長井の農業の栽培形態、あるいは流通形態はいま多岐に渡っている。しかし長井の農産物であるというブランドをつけて販売することが非常に大切な時期になってきた。ブランドによる市場競争性を持たせることが夢になっているが、そのためにレインボープランというものを長井の農産物の栽培手段として、シンボリックなものとしていく必要があるのではないかと思われる。象徴としてレインボープランを活用するということである。併せて、レインボープランの農産物であるということをしっかり区別できる認証システムがフルに機能することが必要である。今後、他の生産物に応用されることも議論されつつある。

レインボープランの農産物は、堆肥の供給量の限界の観点から非常に目標数値が小さくなる。堆肥600トン以下で生産される農産物の量を考えてみれば当然である。また、環境保全型農業という立場からみれば、レインボープランはそのうちのひとつの選択肢でしかない。レインボープランには、環境保全型農業と併せたトータルな農業振興策となることも求められている。その総合体系がレインボープランとして市場性を持ってブランド化されることも必要なことかと思われる。

グローバル経済に対する手段

有機資源の確実な確保

現在の流通体系は地域間だけでは語れない。農業の世界も国際的な流通体系のなかに置かれてしまっている。その結果として農産物の価格低迷があるし、またブランドのすり替え事件が起こっている。これは決して我々生産者の責任ではなく、流通業者の仕掛けた行為でしかないのだが、そういうまがい物が横行するような流通システムに対応する手段が地域内循環ではないかと思われる。つまり目の届く関係の中ではごまかしがきかないのだと、食の安全性を保障するのは地域内循環が最良の策ではないかなというふうに考える。最後の話となるが、総合的な環境保全型農業を進める上で、つまり土を豊かにすることによって食べ物の安全性を確保するという観点から、有機資源を安定した形で供給することが求められている。現在レインボープランには、生ゴミ、畜糞、籾殻という3つの原料があるのだが、それらの供給体制には限界がある、従ってその他の地域から有機資源を確保する手立てが必要になってくる。そのひとつとして考えているのは「地域間バーター取引」と我々は言っているが、つまり大消費地、ある程度の規模の消費地において確保された生ゴミを農村に持ってきてもらい、それを熟成して立派な堆肥に仕上げ、農産物を栽培する。作られた農産物は生ゴミを提供した地域の消費者のもとに帰っていくという農業体系を作っていくというのも一つの方法ではないかと思われる。

< 記録：飯窪秀樹 >